

Museum News

秋田県立博物館ニュース

収蔵資料紹介

カワラハンミョウ

河原や海岸の植物がまばらに生える砂地に生息する。全国的に生息地が減少している。この標本は1992年に秋田市の海岸で採集されたものだが、その後県内で採集されたという情報はないようだ。

アカマダラハナムグリ

秋田県内では稀にしか見つかっていない種で、これまでの発見例は4～5例であろう。猛禽類などの巣材の中で幼虫が育つという特殊な生態が近年知られるようになった。この標本は2018年春に秋田市の住宅地で採集されたもの。

目 次

表紙・目次・・・・・・・・・・・・・・・・・・P.1

企画展・特別展紹介

（報告）特別展 あきた大鉄道展・・・・・・・・・・P.2

（報告）企画展 あきたびじょんセレクション・・・・・・・・P.4

学芸ノート

（生物部門）北上する昆虫～最近の秋田県内の話題・・・・・P.5

（工芸部門）お酒好きの熱い期待に応えた秋田のやきもの

ーランビキーー・・・・P.6

（考古部門）「蓑虫山人紀行」にみる考古資料・・・・・・・・P.7

博物館の風景・・・・・・・・・・・・・・・・P.8



展示期間

秋田県立博物館 7月14日→8月26日

秋田県立美術館 8月 3日→8月26日

特別展「あきた大鉄道展 HE-30系」は、秋田県立博物館と東日本旅客鉄道株式会社秋田支社が実行委員会を組織し開催した展示です。

第1会場博物館の展示構成は次の通りです。

1番線 秋田に鉄道が来た／2番線 鉄道のまち土崎／3番線 秋田機関区／4番線 日本国有鉄道の誕生
5番線 ダイヤ改正と秋田／6番線 あきた平成鉄道史／7番線 鉄路の記憶

「歴史と学び」をテーマに、昭和36年（1961）10月1日から今日に至るダイヤ改正で登場したり消えた列車関連の資料を中心に展示。第1会場最大の見どころは、鉄道模型とプロジェクションマッピングのコラボ。秋田鉄道史を彩る10本の列車が1周24分の線路を走り、背景には、その列車に関する映像が流れるというしくみで鉄道愛好家ならずとも釘付けになる企画でした。

第2会場、県立美術館県民ギャラリーの「駅と旅」をテーマにした展示構成は以下の通り。

1番線 駅の表情／2番線 駅のポスターに見る現代鉄道史／3番線 食とアイテム収集の楽しみ
4番線 秋田ならではの鉄道風景／5番線 特選映像

美術館最大の展示品は「三線軌条（軌道）」。奥羽本線大曲－秋田間は新幹線用のレール（軌間1,435mmの標準軌）と在来線用のレール（軌間1,067mmの狭軌）が一本ずつ敷かれ、新幹線・在来線が別々に走っています。しかし、神宮寺－峰吉川間は新幹線同士がすれ違えるように狭軌の外側に新幹線用のレールが敷かれています。この秋田ならではの鉄道風景を作ろうとJR東日本秋田支社保線課の方々に敷設作業をお願いしました。

展示関連イベント

開催記念セミナー
盆踊りと世界の踊りと鉄道展
手こぎトロッコ
講演会（由利高原鉄道 春田啓郎氏）
演題「白紙ダイヤ改正サンクトオ ヨンサントオ」

7/14
7/21
7/28,29
7/29

ミニSL運転会（秋田総合車両センター）
HOゲージ鉄道模型運転会 会場：県立美術館
汽笛吹鳴体験
ミニ機関車運転会（JR貨物）
HOゲージ鉄道模型運転会 会場：県立美術館
Nゲージ模型運転会
（プロジェクションマッピング付き）

8/4,5
（雨天中止）
8/4,5
8/11,12
8/19
8/25,26
毎日



D51 554 煙室扉

D51 554は、国鉄土崎工場で製造された9両のD51形蒸気機関車の最終号機。重さ200kgの煙室扉は、博物館のガラスケースの中で神々しい光を放っていた。



特急電車エンブレム

昭和34年（1959）日本初の電車特急「こだま」（東京－大阪）が登場する。この登場に際して、特急電車にふさわしいシンボルを募集したところ、全国から5,537点の応募があり、その中で採用されたのがV字型のエンブレムだった。このエンブレムは「こだま」のみならず、その後登場したすべての国鉄の特急電車の先頭に飾られた。



三線軌条敷設風景

とても美術館の中とは思えない作業風景

特別展

あきた大鉄道展

HE-30系



プロジェクションマッピングと模型運転

特急「日本海」登場のシーン。手前の線路には20系客車が走り、模型の背景のスクリーンには当時の20系の映像が流れる。



485系特急電車（田宮利雄氏撮影）

昭和47年（1972）10月2日、羽越本線・白新線の交流電化が完成したことにより、特急「いなほ」（上野－秋田）・「白鳥」（大阪－青森）が485系電車に置き換えられた。485系電車は、直流電化区間・交流電化区間の両方に対応した電車だった。

485系電車の車輪

昭和53年（1978）3月住友金属製の485系電車の車輪。モーターの動力がギアを介して車輪に伝わる。ギアは優美な曲線を描いたヘリカルギアで、このギアを採用することで、車内の静粛性が保証されていた。車輪の重さは1.5トン。ここには、力強さ、正確さ、美しさ、そして優しさが込められている。



菊の御紋章（新津鉄道資料館蔵）

昭和47年、C57 1御召し列車運行（新津－村上間）の際に土崎工場の職員が作製した御紋章。46年ぶりに秋田へ里帰りした。

鉄道愛好熱高めの「あきた大鉄道展」。県外からの観覧者も数多くいらっしゃいました。お尋ねした中で一番遠かった方は香港で展示を見るため来日されたとのこと。頭が下がります。

面白かったのは新潟から来られたお客様。「私はよく新津鉄道資料館に通っているのですが、ある日資料館へ行くと、展示品の『菊の御紋章』が外され、そこに『秋田県博に貸し出した』と表示が出ていました。『これは行かなければ』と思い、追っかけてきました。」

観覧者は19,150人に。県内外から足をお運び頂いた皆様に感謝申し上げます。

最後になりましたが、本展を開催するにあたり、秋田県立大学、公共交通機関各社、諸機関、資料所蔵者の皆様から快く御協力頂きました。厚く御礼申し上げます。（歴史部門 畑中康博）



企画展 あきたびじょんセレクション —秋田をみつける9のテーマ—

2018.4.29～6.22

開館から43年を迎える当博物館の開館当初の理念の一つに「秋田学の推進」がありました。秋田学とは、博物館の全部門が秋田という地域をそれぞれの視点で調査し、秋田とはどういう地域なのか明らかにしていこうとする地域学です。秋田を郡市単位の大まかな地域でくくり、調査し、議論し、結果を展示や研究報告という形で県民に知っていただくという試みは、かつて精力的に行われてきました。開館から数十年が経ち、学芸の職員も変わり、全員で結果を報告する機会は次第に減っていきましたが、数年前には男鹿市・南秋田郡の調査をもとに一応の再開をみました。

地域研究がどうあるべきか、結果としてどう残すかということについては、これからも議論が続いていくことになりますが、私たちは停滞させるよりは形を変えてでも推進を続けることを選択肢の一つに加えました。そのひとつの形が今回の企画展「あきたびじょんセレクション—秋田を見つける9のテーマ—」です。

「あきたびじょん」という秋田県の新しいキャッチコピーには、今の秋田をきちんと捉え直し、未来へ進もうという意味も込められています。それは私たち博物館職員が数十年かけて行ってきた調査研究の意義と合致するものでもあります。

秋田県が抱える少子高齢化、人口減少問題は全国トップで、大きな危機感が持たれています。反面秋田は豊かな自然や食文化を持ち、重要無形民俗文化財の指定件数が全国一位であることに象徴されるように、多くの祭りや伝統芸能などが育まれてきた国です。今回の展示ではこれら秋田の良い所も悪い所もあわせて、なるべく多く取り上げました。

展示は「大地の鳴動～秋田の記録の始まり～自然の恵み～開発～自然との闘い～温暖化～人口減少～新しいエネルギー～高質な田舎」というかなり真面目な構成となりました。9つの視点から秋田の過去と現在を語り、未来を考えてもらいたいという趣旨のもと、展示の途中には観覧者の意見を求めるコーナーや、普段の努力をサプライズライブという形で披露し、展示の一部になってもらおうという企画なども用意しました。

真面目な展示で最も気になるのは観覧者の反応ですが、意見記述やアンケートの結果を見る限り、展示はかなり真剣に見ていただいたようで、老若男女問わず多くの意見をいただきました。アンケートの一つに秋田の未来を問う設問があったのですが、今の秋田が大きく変わって欲しくないとおとんどの方が思われていることには驚かされました。また、サプライズライブは実演側・観覧側双方から喜びの声が聞かれました。

時代の変化と共に、秋田学のあり方も展示も博物館そのものも変わっていくのが世の常だと思います。10年後、20年後、秋田県立博物館が、秋田学がどう変化していくのか、あたたかく見守っていただければ幸いです。

(普及・広報班長 船木信一)



サプライズライブ



会場写真



真剣に展示をみる女子高生

北上する昆虫～最近の秋田県内の話題

温暖化によると思われる昆虫の北上については、これまでも企画展で紹介してきました。10年前くらいまでは、秋田県が北限だったチョウが青森県まで北上した事例の紹介が中心でしたが、最近5年ほどは、これまで秋田県にいなかった南の昆虫が見られるようになった例が出てきました。最近の企画展などと重複する内容もありますが、いくつかの話題を紹介します。

ウラギンシジミは温暖な地方に普通に見られ、1980年代までは新潟県～福島県が北限とされていました。1990年代から南東北を北上し、2010年ころまでには山形県～宮城県の北端に達しました。すぐにも秋田県に入ってくると予想していましたが、初記録となったのは2015年で、その年の冬には、県内で越冬していることも確認されました。実際にはその何年も前から生息していたのかもしれませんが。これまでのところ採集例の北限は由利本荘市岩城内道川、目撃情報の北限は秋田市手形山となっています。一進一退はあるでしょうが、これからも北上していくと思われます。

ツマグロヒョウモンも南のチョウで、やはり著しく北上しています。秋田県では「迷チョウ」として毎年のように見つかりますが、越冬するまでには至っていないようです。2017年秋には、秋田市内で多数飛んでいる場所が見つかり、幼虫も発見されました。秋田市以外でも同様の例があったらしいことが、ネット上の情報にあります。このチョウの幼虫は、庭に植えられたパンジーやビオラを好んで食べるようなので、野山よりも温暖な住宅地で越冬するようになるかもしれません。

チョウ以外の昆虫も紹介しましょう。ヒラタアオコガネは関東以西では普通に見られ、幼虫がシバの根を食べる害虫として知られています。秋田県内での初記録は2009年に由利本荘市矢島で小学生が採集したもの。その後情報がありませんでしたが、2018年春に、秋田市内で複数採集されました。他でも採集されているらしいとの話も聞きます。このコガネムシの場合、卵や幼虫がシバに混入して意図せずに人間によって運ばれている可能性があります。県内で越冬できているのかはまだ不明です。

これらの例は、私自身が発見に関わったり情報をもらったりしたのですが、私が知らない事例も多いことでしょう。変化をリアルタイムにとらえるためには、観察する眼が多いに越したことはないので、以下に、これから北上してくる（すでに来ているかもしれない）わかりやすい昆虫の例を挙げて注意を喚起しておきたいと思います。

それは、カナブンです。子どもの図鑑で樹液に集まる昆虫として必ず登場します。秋田県にはアオカナブンとクロカナブンの2種が以前から生息しますが、「カナブン」という和名の種は記録がありません。数年前には最上川が北限だったという話を聞いています。ネット上の情報では岩手県一関市にはいるようです。秋田県でも象潟あたりにはすでに生息しているかもしれません。どうかぜひ発見してください。

(生物担当 梅津一史)



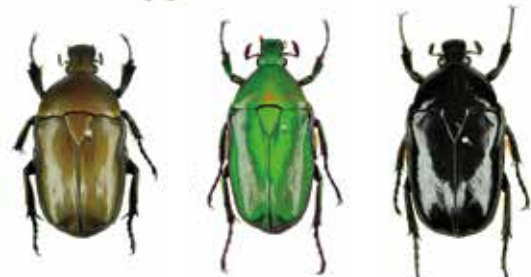
ウラギンシジミ (左:オス 中:メス 右:裏面)



ツマグロヒョウモン (左:オス 右:メス)



ヒラタアオコガネ



カナブン

アオカナブン

クロカナブン

お酒好きの熱い期待に応えた秋田のやきもの

ーランビキー

一昨年に当館ロビーで行った展示「おいしいを彩る秋田のやきもの」では、白岩焼をメインに、特に食にまつわる器という切り口から、秋田のやきものを紹介しました。その中に、今では家庭で見ることのない、不思議なカタチをしたやきものがありました。「ランビキ」と呼ばれるやきものです。

ランビキとは、酒類や医療用アルコールなどを蒸留するために使われた道具のことで、江戸時代日本に渡ってきたとされます。蒸留器として使われた「アランビック」というアラビア語が語源といわれ、漢字では「蘭引」と書きます。日本においても、焼酎づくりや医療用消毒液の製造のために大切な日用品でした。またアルコール以外では、たとえば江戸時代、当時人気だった化粧水「花の露」の製造のためにランビキが使われていました（村田2007）。湯気で花を蒸し、その蒸気を集めて化粧水を自家生産していたようです。一方、本県には明治～昭和期、醸造に失敗したり、古くなって酸味がきつくなったりしたどぶろくを、ランビキで蒸留して飲むというユニークな事例がありました。秋田ならではの感じがします。

ランビキは図のように複雑な2重構造をしており、つぎのような手順で使われました。まず、①鍋のようなものにどぶろくを入れます。②その上にランビキをのせ、③蓋の内部を冷却水で満たします。セッティングが終わったところでいよいよ④どぶろくを加熱します。すると、⑤気化したアルコールがランビキ下半分の容器内に充満し、冷やされた蓋の内側に触れて液化します。そして⑥純度の高いアルコールが管を通して外に導き出されるというしくみになっています。待ちきれない思いで、少しずつしたたり落ちるお酒を眺めていたことでしょう。

明治4年、角館では大きめの白岩焼のランビキが35銭、小さめのものが15銭で販売されました（渡邊1979）。飯茶碗が1銭、土鍋や井ぶりが2銭、大型のすり鉢が8銭だった時代ですから、なかなかの高額商品です。焼酎が店頭で容易に購入できるようになるまで、ランビキは人々の熱い要望に応じて生産されつづけたようです。日々の暮らしを彩ったやきもの。中でも秋田のランビキは、人々の目を楽しませ、味を楽しませ、贅沢な時間を過ごさせてくれる大切な道具だったのでしょう。

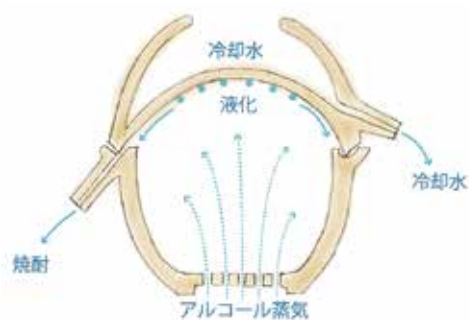
（工芸担当 斉藤 洋子）

参考文献

- 村田孝子 2007『江戸三〇〇年の女性美 化粧と髪型』株式会社青幻舎
渡邊為吉 1979『白岩瀬戸山』満留善



「ランビキ」当館蔵



ランビキ内部図解



「蓑虫山人画記行」 にみる考古資料

蓑虫山人を御存知でしょうか。本名は土岐源吾、天保7年（1836）、美濃国安八郡結村で中世守護大名の流れをくむ名門の家系に生まれました。母の亡くなった嘉永2年（1849）に郷里を離れて諸国を放浪し、旅先の風景や風俗を描いた作品を数多く残したことから、「漂泊の絵師」とも呼ばれています。蓑虫山人という雅号は、広げるとテントのようになる特製の笈を背負った彼自身の旅姿を蓑虫の姿に重ねて付けたと言われ、出身である美濃に語呂をかけたという話もあります。

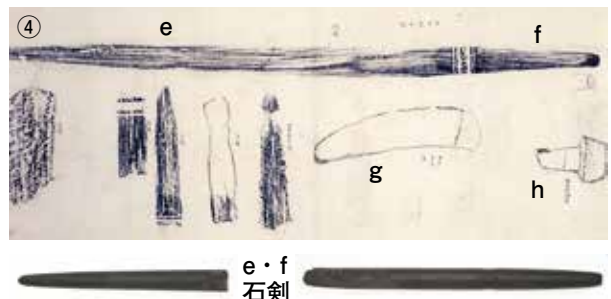
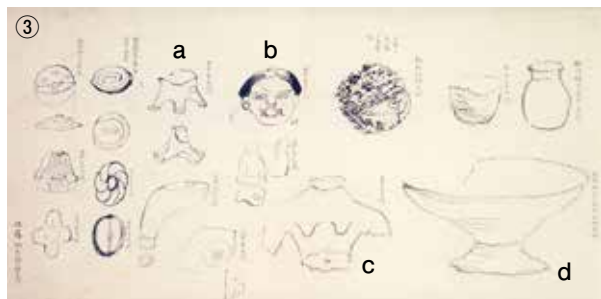
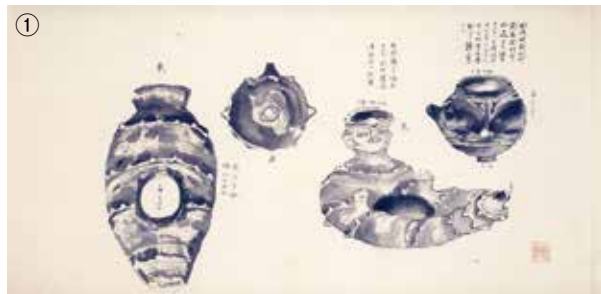
若い頃の足取りは詳しくは分かっていませんが、関西から九州へ渡った後、徐々に東へと歩みを進め、明治10年（1877）、初めて東北に足を踏み入れました。以後長期間にわたって東北各地を巡り、ここで彼は考古資料に強く惹きつけられていきます。明治20年、東京人類学会雑誌に掲載された蓑虫による発掘の報告は、かの有名な亀ヶ岡遺跡をはじめて学界に紹介するものとなりました。彼は後に六十六庵という、いわば博物館設立構想を抱くようになり、考古資料の収集とコレクターの所蔵品の記録を積極的に進めます。

当館所蔵の「蓑虫山人画記行」には、明治24年の陸中国及び明治27年の羽後国での旅程を窺い知ることができ、多くの考古資料が登場します。当

館所蔵の重要文化財「人面付環状注口土器」の絵（写真①）も掲載されていて、出土地とされる狐森遺跡で発掘を試みたことも別の絵から分かります。秋田県内で幾人かの考古資料収集家を訪ねた様子も描かれており、その一人として佐藤初太郎が登場しています（写真②）。佐藤が収集した考古資料は後に当館に収蔵され、次いで「画記行」が館蔵となった際、絵図と一部の資料が合致することが判明しました（写真③・④）。また、平成29年に弘前大学と共に当館所蔵の佐藤初太郎関係資料を調査したところ、新たに絵図と照合可能な資料を確認しています。このような「資料と資料との再会」に立ち会えることができるのも、博物館ならではの醍醐味と言えるでしょう。

還暦を迎えた明治28年、扇田の麓家にいた蓑虫山人は帰郷を決意し、愛用の笈を徳栄寺に納め、翌年郷里への途につきます。名古屋に移住した土岐家の親類を訪ねた後、長母寺に身を寄せていましたが、明治33年（1900）、65歳でその生涯を閉じました。彼の念願であった六十六庵の建設は果たされませんでした。各地に残された作品や彼の出会った資料は事ある毎に紹介され、人々の興味を掻き立てています。

（考古部門 加藤 竜）



a：香炉形土器頂部

b：土偶頭部

c：土偶胴部



d：土師器高坏



g・h：石刀

博物館の風景

博物館では調査研究や資料収集、展示、教育普及などさまざまな活動をおこなっています。

博物館教室



「ちびっこ染め教室」



「土器づくり教室」



「化石と地層の観察会」



「つり教室」

展示・イベント



ふるさとまつり広場展示「七夕絵どうろう」



「あきた大鉄道展の一コマ」



「軒の山吹再現」



「払田柵ロビー展示&講演会」



「盆踊りと世界の踊りと鉄道展」

